様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００１５１

研究課題名（和文）日本統治下の漫画家・北宏二/金龍煥の懸隔

研究課題名（英文）An manga artist under Japanese colonial rule: Interval between Koji and Kim Yong-hwan

研究代表者
牛田　あや美（USHIDA, Ayami）

京都芸術大学・文明哲学研究所・准教授

研究者番号：００４６８７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　戦前、日本で活躍した外地出身の挿絵家でもあり漫画家でもある金龍煥の作品の軌跡を追った。日本からの解放後の朝鮮において、最初の職業漫画家となった彼のルーツは日本への留学からはじまった。掲載された最初の作品から、1945年の朝鮮に帰るまでの日本に現存している書籍、雑誌を調査し、研究成果として発表した。これにより従来、彼の最初の作品は雑誌掲載だと思われていたが、彼の師匠である江島武夫の書籍がその前に掲載されていたことがわかった。日本への留学から、時間をあまりかけることなく、デビューしていることがわかった。
　戦後の韓国での活躍は戦前の日本での作家活動が基盤であることを研究成果として発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　戦前における外地出身者による日本での活躍が、戦後自国へ戻った時の活躍につながっていることが具体的な作品を通し、証明することができた。この研究成果により、金龍煥だけでなく、外地出身者が日本でどのように勉強し仕事を得、戦後自国の文化を醸成していったかの一端になると考えている。
　本研究は、韓国漫画の黎明期、過渡期、成長期の基盤となる戦前の日本の漫画史にあたるため、国を超えた相互研究となる要素が大きい。この研究により韓国のウェブトゥーン学会にて学術賞を獲得した。

研究成果の概要（英文）：　We followed the trajectory of the work of Kim Yong-Hwan, an illustrator and cartoonist from overseas who was active in Japan before the war. He became the first professional cartoonist in Korea after its liberation from Japan, and his roots began when he studied in Japan. From the first published work until 1945 when he returned to Korea, I researched books and magazines existing in Japan and presented them as research results. As a result, it was conventionally thought that his first work was published in a magazine, but it turned out that a book by his mentor, Takeo Ejima. Therefore, I found out that he made his debut not too long time after studying in Japan.
　I concluded from my research that his activities in postwar Korea were based on his artist activities in prewar Japan.

研究分野：メディア

キーワード：マンガ　挿絵　雑誌　戦前　外地　朝鮮

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

21 世紀に入り、韓国では金龍煥が再発見され、韓国のプチョン漫画博物館で個展が行われた。金龍煥は戦前の日本において北宏二というペンネームで活躍した、人気の挿絵家であった。研究当初は、韓国のプチョン漫画博物館、韓国国立図書館、韓国デジタル図書館に調査をした。韓国での金龍煥の再発見は、彼の戦後つまり日本解放後の 1945 年 8 月 15 日以降が中心であった。

日本では完全に忘れ去られている北宏二、韓国では「コチュブ（天狗）三国志」の金龍煥は、同一人物であるにもかかわらず、二つの名前は断絶していた。この二つの名前をつなぐことが当初の目的であった。絵を使用した挿絵や漫画を日本植民地下で活躍していた作家の存在から、日本のマンガ史におけるアジアの国々との関係が深化すると考えている。

２．研究の目的

本研究の目的は、北宏二/金龍煥を政治的な問題で指弾するのではなく、一人の漫画家として政治に翻弄され続けた作家であったことを検証する。

３．研究の方法

戦前の北宏二の活動期（現在分かっている限りで 1933 年から 1945 年まで）の作品をデータ化する。データ化に際し、彼の挿絵、マンガなどの調査を行った場所は、日本では国会図書館東京本館、国会図書館関西館、国会図書館国際子ども図書館、大阪府立国際児童文学館、神奈川近代文学館、相模原市立津久井郷土資料室、東京都立図書館、日本近代文学館目黒、立川市中央図書館、北海道道立図書館、昭和館、三康文化研究所附属三康図書館、そして各大学の図書館である。韓国においては韓国国立中央図書館、韓国国立子ども青少年図書館、韓国国立デジタル図書館、韓国国会図書館、韓国学中央研究院、大韓民国歴史博物館、プチョン漫画博物館であった。

金龍煥を知っている漫画家を探しあて、インタビューをし、実際の彼の創作活動はどんなものであったのかを知る。

韓国の研究会に参加し、情報を集めると同時に、日本だけでなく韓国でも発表していく。

４．研究成果

2018 年、韓国の金海市にある「金海文化の殿堂」と呼ばれる「金海芸術スポーツ会館」にて開催された「International Symposium on the 20th anniversary of the death of Kim Yong-Hwan, master of Korean contemporary comics（韓国現代漫画の父、金龍煥死後二十年を記念した国際シンポジウム）」において招聘され、研究発表をした。またパネルディスカッションにも参加し、日本における北宏二の作品について、韓国では知られていない一面の話をした。ここでの発表を「日本における金龍煥の発見」として論文にした。

2019 年、金龍煥を代表するキャラクター「コチュブ」について調査した。「コチュブ」は現在の韓国でも多くの人々が知っているキャラクターである。このキャラクターは日本で誕生し、朝鮮独立後の英字新聞を経て、大衆誌における人気の登場人物となっていった。そして、1959 年日本にまた戻ってきた。その過程を「一九五〇年代のコチュブ」と題し論文とした。

2020 年、「越境する謎のマンガ家 －戦中の北宏二と朝鮮動乱の金龍煥」として戦前の日本、朝鮮、戦後の朝鮮、そして朝鮮戦争後の韓国、北朝鮮、戦後の日本での作品を分析した。戦後の日本、朝鮮のメディアはアメリカの影響なくては存在していない。国交のない時代に、なぜ彼の挿絵や漫画が越境し、雑誌に掲載されていたのかを作品分析とともに調査報告をした。

2020 年度までに戦前の日本で掲載された金龍煥の作品はすべてリスト化した。研究のまとめとし、2021 年に「日本で出版された北宏二／金龍煥の調査報告」を論文とした。その論文に彼の作品のリスト化し、掲載した。2020 年の後半、韓国においてインタビューを計画していたが、コロナ渦となり、中断せざるを得ず、2022 年に残りの課題を行った。そこで行われたインタビューは従来の金龍煥の経歴と齟齬するものがあり、それについては現在論文として作成している。

2021 年、韓国のウェブトゥーン学会にて発表した「Cochubu as a Self-Portrait」にて学術賞を受賞した。

内容は作者とキャラクターの関係である。韓国において金龍煥は現代マンガの父であり、彼の描いた「コチュブ」は、彼が亡くなってから 20 年経てもまだ韓国の多くの人々が知っているキャラクターである。韓国において、解放後のキャラクターとして「コチュブ」は最初であると位置づけることができる。キャラクターといえば「ミッキーマウス」は最も有名である。もちろん、当時日本で活躍した彼はミッキーマウスを知っていたに違いない。日本では「のらくろ」というキャラクターが人気であった。それに準ずるキャラクターも少年・少女雑誌から登場している。今でこそキャラクタービジネスといえば巨大マーケットである。当時は著作権があいまいであるため、現在のビジネスのようなわけにはいかない。しかし、田川水泡の「のらくろ」の例からもわかるように、戦前から人気「キャラクター」を産み出した漫画家こそ、読者の人気の指標をはかることができた。年月がたち、田川水泡の名前は忘れられても「のらくろ」というキャラク

ターはまだまだ知っている人が多いだろう。同様に韓国においては金龍煥の名前は忘れられても、「コチュブ」を知っている人が多い。

「コチュブ」とは鼻が大きい、ふくらんでいる。あるいは天狗のような鼻という意味である。この「コチュブ」は日本で初出したキャラクターであり、日本のキャラクターから影響を受けたものと考えられる。「コチュブ」が朝鮮において最初に出てきたのは『ソウル・タイムズ』からである。英字新聞のタブロイド版であった。日本の終戦であり、朝鮮の解放日でもある 1945 年 8 月 15 日以降、表現の自由を得た朝鮮では、新聞・雑誌刊行ラッシュを迎えていく。物資不足であるため、新聞・雑誌は発刊されては休刊され、名前が変更、あるいは消えていくという運命をたどっていく。需要は多くあったにもかかわらず、物資不足のため供給が間に合わないことが原因であった。

そんな時代、1945 年 9 月 6 日『ソウル・タイムズ』は発刊された。英字新聞ということからもわかるようにアメリカの機関誌である。そこに左から右に読む四コマの「コチュブ」が掲載された。日本からの解放後、アメリカが「民主主義」を朝鮮に浸透させるための新聞でもあった『ソウル・タイムズ』で、なぜ金龍煥が選ばれたのであろうか。もちろん朝鮮には同時代の漫画家もいた。金龍煥と当時の朝鮮の漫画家との大きな違いは、日本で活躍していたことである。それも戦前の三大少年誌とも言われる『日本少年』『新少年』『少年倶楽部』で掲載していた。

特に戦前、『少年倶楽部』は 1936 年に 75 万部の発行を記録した雑誌である。彼の掲載は 1938 年 6 月号から、1945 年 2 月号まですべてではないがほぼ毎月掲載されている。連載作品もいくつかあり、一年続く作品もあった。戦前の日本の物資不足は周知のとおりであるが、大日本雄弁会講談社はページ数を徐々に減らしながらも終戦の年、1945 年の『少年倶楽部』は、わら半紙の簡易な紙ではあったが発行を続けていた。そんな時代でさえ、大日本雄弁会講談社は彼を選んでいる。同じく大日本雄弁会講談社からの出版である『幼年倶楽部』『少女倶楽部』、さらには 100 万部以上発行をしていた『キング』にも彼の作品は掲載されていた。まさに売れっ子の挿絵家である。

1944 年、大日本雄弁会講談社は朝鮮総督府監修のもと、京城練成の友社という出版社名で『錬成の友』 を朝鮮で創刊した。1943 年に徴兵令が施行され、日本語や日本の情勢を教えることを目的とした練成所が朝鮮各地に開設された。その副読本として総督府から大日本雄弁会講談社へ要請された。内容は日本の「国語」の本であり、朝鮮語と日本語の発音の違いなどの記載があり、大きな字で書かれていることが特長である。

そこに白羽の矢が立たったのが金龍煥であったと考えられる 。1944 年創刊号の表紙を飾ったのは「北宏二」であった。

この創刊号から、連載マンガとして「ガンバリ面長(メンチヤウ)サン」が「金龍煥」 名義で掲載された。いままで日本の雑誌では「北宏二」名を使用してきた金龍煥は、初めて「金龍煥」名義で作品掲載したものであると考えられる。ここで二ページのストーリーマンガ が掲載された。日本の雑誌に掲載された「北宏二」名義の作品は圧倒的に挿絵が多い。戦前の朝鮮の新聞・雑誌では四コママンガのような物語のある作品は掲載されているが、日本の雑誌においては、コマを割るようなストーリーマンガの掲載を見たことがない。現段階の調査において日本の雑誌では『錬成の友』での二ページマンガが、ストーリーマンガ家デビューと考えられる。

「民主主義」を啓蒙したい『ソウル・タイムズ』が金龍煥を採用した理由に、日本での活躍が大きいと推測できる。当時のアメリカが戦前の日本文化を調査していたことは周知の事実であり、また誰がなにをやっていたのか調査していただろうことは想像に難くない。ましてや日本で売れっ子の挿絵家が朝鮮にいるというのは好都合以外のなにものでもなかっただろう。戦前の日本の雑誌は朝鮮でも読まれており、金龍煥の挿絵を見ていた読者も多かった。朝鮮の知識人であった新聞や雑誌を発行する人々の多くも日本で勉強した者が多かった。また金龍煥が日本で活躍した挿絵家であったことは、当時の読者は知らなかったであろうが知識人たちは知っていた。

そこにいち早く目をつけたのがアメリカであったと考えられる。

金龍煥といえば前述した「コチュブ」が代表的キャラクターであり、「コチュブ」イコール金龍煥と現在でも位置づけられる。実際には、戦後の一時期、朝鮮・韓国で活躍した作家であるため忘れられているのが現実である。作家の名前は忘れられても、キャラクターは現在でも生き続けている 。

「コチュブ」は韓国のキャラクターであるが、生まれたのは戦前の日本である。しかしながら、日本で「コチュブ」といっても多くの人は知らない。「コチュブ」のキャラクターは、簡単にいえば「面白いおじさん」である。コメディアンのような面白さではなく、どこにでもいるおじさんであり、おっちょこちょいでいて憎めない。姿は二頭身で「ドラえもん」同様に頭が大きく丸っこい姿をしている。そして鼻が大きい。この二頭身キャラクターは『錬成の友』で連載されていた「ガンバリ面長サン」でその変遷をみることができる。1944 年 1 月の創刊号では、「面長サン」はまだ四頭身ぐらいであり、鼻も大きくはなかった。「面長サン」の鼻の大きさは回を重ねる度に特徴的な形となっていく。また四頭身から三頭身になるのも回を重ねるとその姿が顕著になっていく。1 月号から 11 月号へと連載を重ね、徐々に「面長サン」の姿は変わってきている。定期購読している読者にはあまり気が付かない変遷である。同年の 12 月号から、一気に「面長サン」の姿は変わる。いままで丸みを帯びていなかった「面長サン」の姿は、丸くなったのである。「コチュブ」の原型がここに誕生した。

キャラクター設定として、「コチュブ」は人々を笑わそうとしているのではなく、いたく真面目に行動をし、それが人々に笑われるというような日本のマンガキャラクターの主要な系統に位置する。もっとわかりやすく言うと、長谷川町子の「サザエさん」のサザエさんの男性バージョンである。

「サザエさん」も「コチュブ」も少しのずれはあるにしても、同世代の誕生である。「サザエさん」は福岡の『夕刊フクニチ』での 1946 年の連載からであり、「コチュブ」は 1945 年の『ソウル・タイムズ』からである。実際には、その前に日本で誕生しているが、多くの人に認知される「連載」のかたちをとった『ソウル・タイムズ』ということで一九四五年としておこう。もちろん英字新聞であることから、一般の人々に知れ渡るのはもっと後になる。

「サザエさん」も「コチュブ」も性別が異なるだけで、二人とも同じような性格のキャラクターとして描かれている。これは彼ら二人だけにあてはまることではなく、日本のキャラクター、特にマンガの主人公としての典型的なキャラクターであると考えることができる。戦前であれば、例えば岡本一平の漫画「人の一生」の主人公「唯野人成」や人間ではないが田河水泡の「のらくろ」の主人公の猫もやはり同じようなキャラクター設定をされている。長谷川町子においては田河水泡の弟子であるという経緯からも理解できる。このような設定となっている主人公は、現在でも多くのマンガの登場人物として出てくる。特に、時事問題を取り上げることの多い新聞連載の四コママンガの主人公の性格設定によく使われる。つまり「サザエさん」も「コチュブ」も、まったく新しい主人公とした性格・性質ではなく、作者である長谷川町子や金龍煥の独自のキャラクター設定とは言えないと考えられる。マンガではないが、江戸時代の十返舎一九の読物「東海道中膝栗毛」の主人公である、弥二さん、喜多さんもこのキャラクターのカテゴリーに入る。つまりマンガ独自のものでなく、読物の登場人物としてすでにストーリーマンガが確立される以前から物語のなかで登場していた。

「コチュブ」は二等身で丸っこい人物であり、「ドラえもん」のような容姿である。「コチュブ」は名前の通り、鼻が大きく、気のいい小父さんで可愛い。金龍煥がまだ朝鮮に住んでいた 1952 年 8 月号の講談社 出版『面白倶楽部』で掲載された「のんきな小父さん」というマンガがある。ペンネームは「北宏二」となっている。この小父さんが「コチュブ」に似ており、日本版「コチュブ」といえる。

「のんきな小父さん」は大正時代、麻生豊が生み出した「ノンキナトウサン」から影響を受けている。もちろん題名からもすぐにわかるが、「ノンキナトウサン」を読者に想起させるためのタイトルである。映画化されていることもあり、当時の人々には「ノンキナトウサン」はお馴染みのキャラクターであった。大正時代に一世を風靡した漫画であり、「ノンキナトウサン」を真似た作品は、それ以後多く生み出されることになる。現在のように著作権を主張する時代でなかったからこそ、日本のマンガは発達してきた歴史がある。まさしく「ノンキナトウサン」はそのなかでも代表的なキャラクターの一つでであった。金龍煥が実業之日本社発刊の少年雑誌『日本少年』で掲載した同じ時期に、那須良輔の「のんきな殿様」が同雑誌に掲載されている。

ある大きなキャラクターが一般に認知されると、そこから派生したキャラクターが次々と生み出されるのが日本のマンガの世界である。

麻生豊の「ノンキナオジサン」もまた元ネタのマンガがある。日本の『日刊アサヒグラフ』に翻訳掲載されていたアメリカのジョージ・マクマナスの「親爺教育」に原型がある。これはキャラクターの容姿というよりも、マンガの描き方、例えば吹き出しや構造などが影響を受けている 。アメリカから日本へ、日本から朝鮮へと形をかえながら『ソウル・タイムズ』へと受け継がれている。つまり「コチュブ」の四コママンガは、英字新聞の一面の下を飾ることができる、英語を使用する読者にとっても受け入れやすいマンガであっただろうと考えられる。

『ソウル・タイムズ』を皮切りに、彼の朝鮮・韓国での漫画・マンガ家としての活動は活発になっていく。金龍煥は朝鮮で最初のマンガ家団体を起ち上げ、マンガの同人誌 を出版している。当時、物資のない朝鮮で出版は、たやすいことではなかった。現在、朝鮮・韓国で金龍煥が起ち上げた雑誌、あるいは彼の作品を掲載していた雑誌を調査していくと、発刊されては消えていく新聞・雑誌が多いことがわかる。

『ソウル・タイムズ』で掲載されていた「コチュブ」は、キャラクターを生み出した金龍煥の姿として流通した。これは、作者が「コチュブ」に自身を投影していることに起因している。「コチュブ」は三コママンガや四コママンガ、あるいは短編・長編のようなストーリーのあるマンガの主人公だけではなく、風刺漫画でも登場している。日本では風刺漫画を描く漫画家とストーリーマンガを描くマンガ家は別の職業であると考えられる傾向がある。実際、日本で両方やっている漫画家を想像してみると、なかなか思い当たらないのではないか。

風刺漫画は、日本では新聞に掲載されることが多く、現実社会の世相や政治を風刺することが多い。特に社説やコラムの近くに掲載されることが多く、漫画家であるよりもジャーナリストとしてのセンスがないと描けないことが多い。日本では近藤日出造や山藤章二という名前で想像できるだろう。一方ストーリーマンガは、雑誌掲載されるマンガ家であり、手塚治虫や藤子不二雄に代表される。彼らは作者として名前が記載されるに対し、風刺漫画家は、作者の名前が書かれていないこともある。絵の中に署名があることもあれば、ないこともある。新聞の風刺漫画や四コママンガは、決まった新聞を読んでいる定期購読者にとり、作者の記載などなくともわかることが多い。つまり新聞社お抱えの風刺漫画家、四コママンガ家がいる。

ところで、一つの新聞で風刺漫画と四コママンガ、ともに同じマンガ家が描いていることをみ

たことがあるだろうか。金龍煥は一つの新聞に風刺漫画、四コママンガともに描いている。これは金龍煥の例だけではなく、同じ時代の漫画家である「熊超」 もまた風刺漫画と四コママンガともに描いているのをみつけたことがある。これは戦後まもない新聞であったことから、漫画・マンガの描き手が少なく、決まった作家に仕事がまわってきたことの表れだろう。金龍煥もその例外ではないだろう。実際に日本でも同じ雑誌に名前を変えて連載を持っているという例があるように、ペンネームを変えることにより、マンガ家不足を補っている面がある。「コチュブ」は風刺漫画にも四コママンガにも登場するキャラクターである。

「コチュブ」は「ノンキナトウサン」や「サザエさん」、「ドラえもん」のように連載、掲載を重ねるごとにキャラクターが成長し、最初の設定を崩さないまでもいくつかの設定が足されていく。つまりある特定のキャラクターは、連載、掲載を積み重ねることによって重層された人物となっていく。「コチュブ」もやはり同じ過程を経ている。しかし、「ノンキナトウサン」や「サザエさん」、「ドラえもん」と大きく異なるのは、「コチュブ」が新聞の風刺漫画に登場して点である。

のらくろを田河水泡に、サザエさんを長谷川町子に、鉄腕アトムを手塚治虫に、ドラえもんを藤子不二雄に、同一視することはあまりないだろう。戦前や戦後の娯楽のない頃、幼少期を過ごした子どもたちは作者とキャラクターを同一視していたとも考えられるが、分別のつく年齢になればキャラクターはキャラクター、作者は作者と考えるようになる。「コチュブ」の場合はこの反対であり、金龍煥と同時代の読者にとり、「コチュブ」は漫画家自身」であると認識され、年月を重ねた連載、掲載によって同一視を醸成していった。

まず、「コチュブ」は金龍煥に似ており、キムが自身の似顔絵を描く時は「コチュブ」を描くことがある。つまり作者によってキャラクターとの同一視がなされている。例えば一九五五年一月号の『少年世界』の目次に「コチュブ」の絵が出てくる。そこには金龍煥の名前はないが、「コチュブ」が「次回はドンキホーテよりも面白いものを描く」と宣伝している。作者のメッセージを、キャラクターが代わりに言っている。

加えて、風刺漫画に「コチュブ」が登場してきたことにも起因している。風刺漫画は世情を背景とし、風刺漫画家（あるいは新聞社）の意見が最も絵に反映されやすいメディアである。そこに「コチュブ」が登場していれば、作者の意見であると読者も自然と思う。

例えば政権が替わり重い税金をかけられることになれば、絵のなかの「コチュブ」は税金にあえぐ無辜の人として描かれる。この無辜の人は作者でもあり、読者でもある。この風刺漫画を見ている読者は「コチュブ」と同じく重い税金をかけられる人々である。「コチュブ」のキャラクター設定であるおっちょこちょいな小父さんは、作者でもあると同時に読者にも投影される。作者も読者も同じ時代を生きる人間である。作者には、読者の共感を得られる風刺漫画を描く人が選ばれることからまさに理にかなっている。また「コチュブ」は、好奇心旺盛で当時の韓国の人々が行けなかった外国へと旅行に行っている。日本への興味が多いのか、日本の文化を「コチュブ」が紹介しているものもあれば、掲載当時の日本の世相を描いたものもある。そんな風刺漫画はエッセイの要素をおびている。

以上が学術賞を獲得した内容の概要である。

また、戦争が激化してきた 1941 年以降、金龍煥だけでなく、挿絵家、漫画家たちの作品に「南方」の姿が顕著となってきている。それについて「戦前における子供たちにとっての南方」を発表した。

2022 年、翌年には金龍煥に焦点をあて「北宏二の挿絵にみる南方」として両方とも国際学会にて発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 牛田あや美	４．巻 3
２．論文標題 北宏二の挿絵にみる南方	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本人の「南方」経験の再検討 －グローバル化時代の新しい歴史像の構築にむけて－	６．最初と最後の頁 pp.31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 牛田あや美	４．巻 25
２．論文標題 日本で出版された北宏二／金龍煥の調査報告	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都芸術大学紀要	６．最初と最後の頁 pp.72-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ayami Ushida	４．巻 2
２．論文標題 Cochubu as a Self-Portrait	５．発行年 2021年
３．雑誌名 韓国漫画Webtoon学会	６．最初と最後の頁 pp.13-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 牛田あや美	４．巻 6巻3号
２．論文標題 擬人化される動物たち	５．発行年 2021年
３．雑誌名 モンキー	６．最初と最後の頁 pp.72-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 牛田あや美	４．巻 2
２．論文標題 戦前における子供たちにとっての南方	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本人の「南方」経験の再検討‐グローバル化時代の新しい歴史像にむけて‐	６．最初と最後の頁 pp.35-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 牛田あや美	４．巻 25
２．論文標題 日本で出版された北宏二／金龍煥の調査報告	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都芸術大学紀要	６．最初と最後の頁 pp.72-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 牛田あや美	４．巻 24
２．論文標題 越境する謎のマンガ家　‐戦中の北宏二と朝鮮動乱の金龍煥‐	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都芸術大学紀要	６．最初と最後の頁 pp.58-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 牛田あや美	４．巻 22
２．論文標題 日本における金龍煥の発見	５．発行年 2018年
３．雑誌名 京都造形芸術大学紀要2017	６．最初と最後の頁 pp.58-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牛田あや美	4．巻 23
2．論文標題 一九五〇年代のコチュブ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都造形芸術大学紀要2018	6．最初と最後の頁 pp.34‐43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 牛田あや美
2．発表標題 作家は物語の主人公となり得るか‐マンガ家・金龍煥の「コチュブ」を巡って
3．学会等名 京都芸術大学文明哲学研究所
4．発表年 2023年

1．発表者名 牛田あや美
2．発表標題 北宏二の挿絵にみる南方
3．学会等名 日本人の「南方」経験の再検討 、日本大学芸術学部（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 牛田あや美
2．発表標題 謎のマンガ家－戦中の人気挿絵家・北宏二と韓国マンガの父・金龍煥－
3．学会等名 京都芸術大学文明哲学研究所
4．発表年 2021年

１．発表者名 Ayami Ushida
２．発表標題 Cochubu as a Self-Portrait
３．学会等名 COWEKO21 Autumn International Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 牛田あや美
２．発表標題 戦前における子供たちにとっての南方
３．学会等名 日本大学学術研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 牛田あや美
２．発表標題 日本における金龍煥の発見
３．学会等名 International Symposium on the 20th anniversary of the death of Kim Yong-hwan, master of Korean contemporary comics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関